論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	西田 亮介

論文審査担当者　主 査　土屋 大洋
副 査　井庭 崇
金子 郁容
熊坂 賢次

学力確認担当者：

本論文は、なぜ、どのようにして、日本の社会起業家（social entrepreneur）たちが2000年代に登場し、彼らが何を成し遂げてきたのかを解明した研究である。社会起業家たちは、従来の政府による公共サービスや民間の市場サービスで十分なサービスが提供されなかった分野に注目し、収益化に成功している。無論、彼らのねらいは、収益を上げることではなく、むしろ、社会的な問題を解決することに向けられてきた。しかし、そうした問題解決を持続させるためには、無償のボランティアではなく、わずかでも収益を上げることが重要である。政府も市場も十分なサービスを簡単に提供できなかった分野で成功するのは簡単なことではない。それをいかに社会起業家たちが成し遂げたのかを解明することは、その背景にある社会変化をとらえ、今後の社会制度を考える上で重要である。

社会起業家の登場と役割については、非営利組織（NPO）論などの延長として米国や欧州でも論じられてきた。しかし、そうした先行研究をそのまま日本の社会起業家たちに当てはめてみても、なぜ2000年代の日本で彼らが一気に登場してきたのかをうまく説明することはできない。そこで本論文では、個々の社会起業家の起業過程をインタビューに基づいてたどるミクロな分析を行うとともに、従来、起業家の卓越性の背後に隠れていて、言及される機会が少なかった政策というマクロな視点、さらにコミュニティというメゾ・レベルの社会システムの変化にも注目するという複眼的な視点から日本における社会起業家の登場を説明した。

社会起業家とは、社会問題の構造的要因を、アイディアやビジネスモデル、組織、寄付、技術といった要素の革新的な組み合わせによって、解決する起業家である。日本においては、一般的に起業は人気のある選択肢ではなく、若者の多くは高校や大学卒業後に既存の企業に就職する傾向が強い。本論文で取り上げた社会起業家たちもまた、いきなり起業に向かうのではなく、日常生活を送る中で見つけた弱い問題意識を長期間にわたって保持し、やがて環境が整った段階で起業を決意するというパターンを持っていた。しかし、そうした決意を可能にするのは、身近なロールモデルの存在や2000年前後にブームとなったIT起業家たちが残したコミュニティの存在が大きいことも分かった。さらには、NPO法の成立など、政府や地方自治体の政策的変化も後押しをしていた。

著者による本研究の貢献は、政府も市場も失敗しながら解決が待たれている社会問題に、社会起業家といわれる人たちがアプローチをしてきたのかを明らかにすることで、社会に生きる個々人にとっても、政府の政策にとっても、別の選択肢があることを明らかにするとともに、日本社会に生まれてきた変化を読み取った点にある。さらには、SFCや慶應義塾大学、そして、社会全体への展開を通じた成果によっても高く評価できる。以上により、本研究を通して、著者は先端的な研究を行なうために必要な高度な研究能力、新たな研究領域を切り開く発想力、並びにその基礎となる豊かな学識、および、研

論文審査の要旨及び担当者

究成果を社会貢献へ結びつける能力を有することを示した。したがって、本委員会は、本論文の著者は、博士（政策・メディア）の学位を受ける資格のあるものと認める。